

第12回 理研バイオリソースセンター リソース検討委員会 議事要旨 実験植物開発室

日 時 平成25年3月11日(月) 10:00~12:45
場 所 富国生命ビル 23階 理化学研究所 東京事務所 大会議室

出席者

- (委員等) 岡田 清孝 委員長、鎌田 博、後藤 伸治、篠崎 一雄 各委員
- (文部科学省) 細野係長
- (NBRP) 佐藤事務局長、平田局員
- (理研側) 小幡センター長、阿部副センター長、小林実験植物開発室長、今泉研究推進部長、村上課長、他

■バイオリソースセンターの次期中期目標、計画について

- 理研バイオリソースセンター(理研 BRC)は基盤センターであり、基盤事業の見直しの仕方をうまくやらないと本当に基盤が崩壊する可能性がある。理研 BRC は、NBRP(National Bio-Resource Project)等の国のプロジェクトと連携して業務を行っているというセンターの立ち位置を明確に打ち出すことが必須である。
- 所謂、2000年に始まったミレニアムセンターは、ライフサイエンスの推進という国の施策があって、基礎的なライフサイエンスを推進した経緯がある。しかし、その役割は多分 2010年を過ぎて終えたと思われる。グリーンイノベーション、ライフイノベーションと言う二つの課題にどのように貢献する基礎研究、基盤研究、あるいは応用的な研究なのか、ということを確認に打ち出さないと戦略センターは成り立たない。従って、理研 BRC もイノベーションに向けて、具体的な方針を策定し基盤整備を行うことが重要である。
- 生物遺伝資源の海外との取引をどうするかといった点に関して、昨今、研究者コミュニティで意識されつつある。現在、最も懸念されることは大学の先生方が全く知識もない状態であり、また、現状リソースの国際取引に関して相談窓口が存在しない点にある。貢献できるような組織を是非とも作るべきと思われる。

■実験植物開発室の平成24年度成果について

- 植物関係のリソースの流れは、シロイヌナズナだけという研究者は少なくなりつつある。色々な種類のモデル系になり得るものを見て、手を動かして育ててみたいという希望が多い。従って種々のモデル植物を将来計画に入れることを検討すべきである。
- ミナトカモジグサは、バイオエナジータンク視点、あるいはバイオマスの分野から着目されている。また木原研で実施している理由は、コムギを出口に設定していると思われる。一方、イネゲノムから始まった農作物ではイネのバイオリソースをどう使っていくのか農水省でもかなり真剣な議論をされており、その分野とのマッチングをどこかで確認していかないと理研 BRC 実験植物開発室の差別化ができない。
- モデル植物の選定は、例えばソルガム等の大型の草本の場合、植えて終

わってしまうことになる。草本の扱いやすい、しかも室内での栽培が可能であり、種子も簡便に採取可能であり、多様な系統があるものを選定し、それをうまくアピールして、現在のシロイヌナズナ研究者を新しい方向に導くぐらいの力を備えて欲しい。

■実験植物開発室の平成25年度計画について

- NBRP の植物グループとしての議論を理研 BRC がリードして頂いたら良い。恐らく植物リソース分野についても次の 10 年をどうするのかという議論が必ずあると思われる。植物分野は、多様な作物が出口になるので、NBRP の植物グループとのコミュニケーションは非常に重要である。
- シロイヌナズナ継続の可否については、植物関連学会の意見だけでなく、広く学術会議の植物委員会等で提起して頂き、透明性を確保しておく必要がある。また、農学系も含めた学会等で、ワークショップを設定し提案するといった方策もうまく組み合わせていくということが大切である。
- シロイヌナズナが終わったわけではなく、分野から俯瞰的に見た場合、例えば進化生態学分野では、多様性を意識したシロイヌナズナ野生種のかなりのものが必要になってきている。この分野についてどうするかといった点も考慮した方が良い。また、シロイヌナズナに関連した多様な cDNA を収集することにも力を入れて頂けると良い。
- シロイヌナズナだけに依存していると、提供数が減少してしまうので、関連する表現型解析手法等の付加価値を検討するとともに、先導的なりソースの利用方法を含めて俯瞰的に考える必要がある。

■提供手数料の改訂について

- 大学での授業等、教育用の提供手数料の有無については、関連学会等でアンケートを募り、その結果を基に設定することを推奨する。

以上